

コロナ禍における大学生のビリーフ及び
学習への取組み方について
—中国語学習者を対象に—

安藤 好恵

On the Beliefs and Learning Behavior of University
Students during The COVID-19 Pandemic :
A Survey of Japanese CFL Learners

ANDOU Yoshie

摘要

本文以日本某所大学的二年级汉语学习者对象，以新冠肺炎（COVID-19）疫情爆发前后为界，通过对疫情前传统课堂教学与疫情后网络在线教学的比较，调查学习者的学习观念与学习行为的异同。在对疫情前（2014年-2017年）与疫情后（2020年）的二年级汉语学习者群体进行考察时，t-test结果显示：2020年学习者群体在学习观念上有九个题项（“用正确的发音说汉语很重要”“我希望能说一口流利的汉语”“我跟别人讲汉语会感到不安，胆怯”等）比疫情前的学习者群体高，在学习行为上有五个题项（“上课时不窃窃私语”“认真完成作业及课题”等）比疫情前的学习者群体高，有两个题项（“在全班同学面前积极提问和发问”等）比疫情前的学习者群体低。文章最后就后疫情时代的汉语教学提出了相应建议。

キーワード：コロナ禍 中国語学習者 ビリーフ 学習への取組み方 アンケート調査

1. 研究の目的

COVID-19（新型コロナウイルス感染症）による影響（以下、コロナ禍と記す）のため、2020年度の大学教育の現場は大きな変容を強いられた。筆者の勤務校においても、従来の対面授業に代わり、遠隔授業でどれほどの教育効果が上げられるのか十分な検討をする時間もないまま全面的な遠隔授業（以下、オンライン授業と記す）が実施された¹⁾。オンライン授業では従来の対面授業に比べ受講者の反応がわかりにくく、受講

者の全体像を捉えにくい。1年に及ぶオンライン授業を経て学生の学習意欲、学習態度にはどのような変化が生じたか、学生はこの1年間の学習状況をどのように感じているかを把握することは今後の授業方針を考える上で重要な指針になると思われる。

筆者はこれまで中国語学習者を対象に、彼らの中国語学習に対するピリーフ²⁾や、学習への取組み方に関する調査研究を行ってきた(安藤 2018, 2019, 2020)。本研究では大学において対面授業とオンライン授業を1年ずつ経験したことになる2年生を対象にアンケート調査を行い、これまでの調査過程で得られた大学2年生のピリーフおよび学習への取組み方に関する調査結果と比較し検討する。また、オンライン授業に関する自由記述について、テキストマイニングを行い検討する。得られた分析結果を基に、コロナ禍において約1年間のオンライン授業を体験した大学2年生の中国語学習に対する意識について把握し理解を深めることにより、今後の学習支援につなげることを目的とする。

2. 研究方法

2.1 対象者と期間

対象者は、A大学中国語専攻の2年生71名中、講義科目と演習科目両方の授業を履修している55名を対象とした。アンケート調査の依頼と実施は、朝日ネットによるクラウド型教育支援システムmanabaを用いて行った。依頼文書にはアンケート調査への協力は任意であり、成績には影響しないことを明記し、特定の科目ではなく「今年の中国語学習全体」として回答することを求めた。

調査時期は2020年12月から2021年1月の約1ヵ月間であり、47名から回答を得た。回答者には中国人留学生1名が含まれていたが、本調査の項目内容は日本人学習者を想定したものであることから除外し、46名を分析対象とした(以下「2020年の2年生群」と記す)。

調査校においては2020年9月から、有識者の指導の下、入構時の検温や手指の消毒など適切な感染防止対策をした上で、一部の科目で対面授業が実施された。対面授業が実施される場合には、同等の授業内容がmanabaで配信され、学生は対面授業とオンライン授業のどちらかの受講を自身で選択できる状況であった。

2.2 調査内容

質問紙は安藤 2020において使用したピリーフと学習への取組み方についての調査項目内容³⁾と同様のもを用い(ピリーフ20項目、学習への取組み方17項目)、本調査のために新たに設定した3項目を加え合計40項目で構成された。新たに設定した3項目はオンライン授業に関する内容で、①オンライン授業でよかった点は何か(自由記述)、②オンライン授業で困った点は何か(自由記述)、③自分に最も合っている(合っ

ていた）授業形態は何か（対面、Zoom、課題提出のみから1つ選択）とした。

2.3 分析方法

本調査で得られた46名の回答と、過去の2年生の回答（ビリーフ：223名、2015、16、17年度生、学習への取組み方：213名、2014、16、17年度生、以下「従来の2年生群」と記す）について、等分散性を確認のうえ対応のないt検定を用いて検討した。分析にはIBM SPSS Statistics25（IBM, Armonk, NY, USA）を使用した。有意水準は5%とした。新たに設定した3項目については、テキストマイニングを行い、クラスター分析と対応分析の結果から検討した。分析にはKH Coder3を使用した⁴⁾。

3. 結果

3.1 ビリーフ及び学習への取組み方に関する分析結果

紙幅に限りがあるため、ビリーフ20項目中、有意差が見られた9項目（7, 11, 12,

表1 ビリーフの項目得点平均値およびt検定結果

項目内容	従来の2年生群 n=223		2020年の2年生群 n=46		t値
	平均	標準 偏差	平均	標準 偏差	
7. 中国語は、話したり聞いたりするより、読んだり書いたりする方がやさしい。	3.45	1.03	3.78	1.07	1.98*
11. 正しい発音で中国語を話すことは大切である。	4.35	0.86	4.77	0.67	3.57**
12. 中国人と中国語の学習をするのは楽しい。	3.67	0.96	4.17	1.06	3.23**
13. 中国語を繰り返し練習することは重要だ。	4.36	0.79	4.76	0.71	3.45**
14. 私は、他の人と中国語を話すことに不安を感じて臆病になる。	3.29	1.15	3.72	1.17	2.30*
15. 中国語学習を始めた最初の時期に中国語の間違いを直されないと、後で正確に話すことが難しくなる。	3.91	0.96	4.36	0.83	2.89**
16. Audio Visual 機器や素材を使い、中国語を練習することは大切だ。	3.70	0.94	4.09	0.84	2.60*
18. 私は中国語が上手に話せるようになりたい。	4.26	0.90	4.78	0.70	4.38***
19. 私は中国人の友達がほしい。	3.79	1.09	4.26	1.12	2.67**

*** p < 0.001 ** p < 0.01 * p < 0.05

13, 14, 15, 16, 18, 19) を表 1 に示す。9 項目全てにおいて、「2020 年の 2 年生群」のビリーフは「従来の 2 年生群」に比べ高い傾向を示した。

同様に学習への取組み方 17 項目中、有意差が見られた 7 項目 (5, 6, 7, 8, 11, 14, 15) を表 2 に示す。このうち、5 項目 (5, 6, 7, 14, 15) において「2020 年の 2 年生群」は「従来の 2 年生群」に比べ高い傾向を示し、2 項目 (8, 11) において低い傾向を示した。

表2 学習への取組み方の項目得点平均値およびt検定結果

項目内容	従来の 2 年生群 n=213		2020 年の 2 年生群 n=46		t 値
	平均	標準 偏差	平均	標準 偏差	
5. 授業中に私語をしない	2.91	0.80	3.48	0.72	4.46***
6. 授業で出された宿題や課題はきちんとやる	3.09	0.68	3.33	0.56	2.19*
7. レポートやテストを提出する前に見直す	3.13	0.76	3.39	0.71	2.17*
8. クラス全員の前で、積極的に質問や発言をする	2.31	0.84	2.00	0.70	2.58*
11. グループワークやディスカッションでは、進んでまとめ役をする	2.23	0.86	1.85	0.60	3.60**
14. グループワーク以外で、友だちと一緒に勉強する	2.51	0.95	2.85	0.99	2.16*
15. 資格や免許の取得を目指して勉強する	2.77	0.87	3.13	0.78	2.63**

*** p < 0.001 ** p < 0.01 * p < 0.05

3.2 自由記述に関する分析結果

3.2.1 オンライン授業でよかった点

自由記述「オンライン授業でよかった点は何ですか」について階層的クラスター分析 (抽出法: Ward 法、測定方法: Euclid) を行った。解釈可能性から最適と考えられる 4 クラスターを抽出した。結果を図 1 に示す。第 1 クラスターは「授業」「受ける」の 2 語で構成され、「自分の好きな時間に授業が受けられる」「授業の内容を何回も見直すことができるため事後学習ができる」「コロナの危険性があったがオンライン授業では安心して受けれること」など自宅で授業が受けられることが挙げられた。第 2 クラスターは「通学」「時間」の 2 語で構成され、「私は通学に 3 時間かけていたので通学時間が減ってよかったです」「移動時間がなくなったため時間に余裕を持って授業を

受けることができる」など通学時間の削減が挙げられた。第3クラスターは「パソコン」「学習」の2語で構成され、「これから主流になってくるであろうオンライン学習やパソコンを使うことに以前よりかなり慣れた」「パソコンが得意ではなかったが、前よりパソコンをうまく活用できるようになった」などパソコンスキルの上達が挙げられた。第4クラスターは「勉強」「自分」「課題」の3語で構成され、「自分のやりたいタイミングで勉強ができる」「授業に必ず出席でき、空いた時間に勉強できる」「自分の好きな時間に視聴し課題の提出ができる」など自分のペースで学習が進められることが挙げられた。

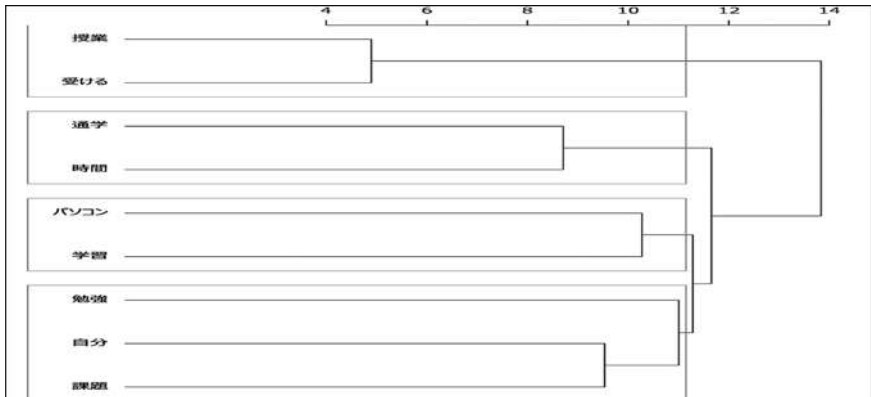


図1 オンライン授業でよかった点 デンドログラム

3.2.2 オンライン授業で困った点

自由記述「オンライン授業で困った点は何ですか」について階層的クラスター分析（抽出法：Ward法、測定方法：Euclid）を行った。解釈可能性から最適と考えられる4クラスターを抽出した（図2）。第1クラスターは「提出」「課題」「多い」の3語で構成され、「課題提出が多くなった」などの課題の量に関することと、「課題提出をたまに忘れてしまいます」「きちんと課題が提出できているか不安」など課題の提出に関することが挙げられた。第2クラスターは「ネット」「環境」「悪い」「時間」「回線」「難しい」の6語で構成され、「ネット環境に問題があることがあり、集中して授業に取り組むことができない」などネット環境や回線の悪さに関すること、「（科目によって授業のやり方が違うため）慣れるのに時間がかかった」、「家にいる時間が長く、モチベーションを保つことが難しい」「課題提出や課題提出の期限の把握が難しい」など自己管理の難しさに関することが挙げられた。第3クラスターは「授業」「分かる」「対面」「感じる」「受ける」の5語で構成され、「授業が分かりづらい」「勉強をする意欲が昨年の対面授業をしていた時より薄れていると感じた」「同じ授業を受ける学生の意見や考えを聞くことができないこと」など授業の分かりにくさ、学習意欲の低下が挙げられた。

第4クラスターは「先生」「質問」「中国語」「参加」「Zoom」「人」の6語で構成され、「困った時に先生に聞けず、そのまま諦めてしまうことが多い」「質問がしたくてもすぐに質問ができない」「中国語の発音を訂正してもらえなかったり、課題も個人的に直してもらえないので自身の中国語が上達したかしていないかわからない」など教員とのコミュニケーションが取りにくいこと、「正直 zoom でやる必要を感じないような授業がいくつかあった」「(課題提示の仕方に問題があり) しっかり出ている人と出していない人との区別ができていないこともどうかと感じた」など授業運営に関することが挙げられた。

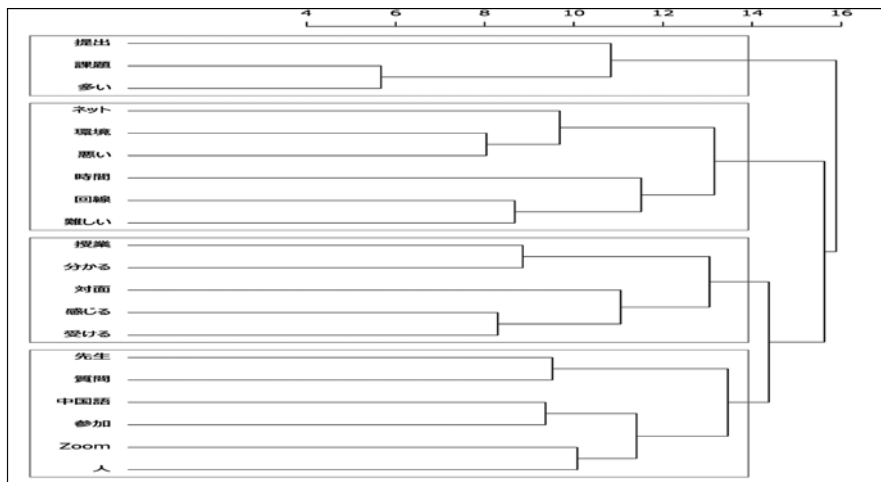


図2 オンライン授業で困った点 デンドログラム

3.2.3 オンライン授業でよかった点、困った点と自分に合っている (いた) 授業形態

自分に合っている (いた) 授業形態についての調査結果は、対面授業 24 人 (約 52%)、Zoom 10 人 (約 22%)、課題提出のみ 12 人 (約 26%) であった (図 3)。

この結果に基づきオンライン授業でよかった点、困った点と自分に合っている (いた) 授業形態との対応分析を行った (図 4、5)。

オンライン授業でよかった点と自分に合っている (いた) 授業形態との対応分析では、原点付近に「時間」「課題」が配置され、これらの語と最も近い位置に「対面」が配置された。「Zoom」の近くには「勉強」「通学」が配置された。「課題のみ」の付近には関連性の強い語は抽出されなかった。このことから多くの学生はオンライン授業によって時間に余裕ができ、課題に取り組むことができるという利点は認めながらも、対面授業を望んでいることがわかった。

オンライン授業で困った点と授業形態との対応分析では、原点付近に「受ける」「課題」が配置された。「対面」の近くには「授業」「多い」「先生」などの語が配置され

た。「Zoom」の近くには「提出」「人」が配置された。「課題のみ」の近くには「環境」「ネット」が配置された。このことから対面授業を希望する学生の多くはオンライン授業の授業内容、課題の多さ、教員とのコミュニケーションに困難を感じていることがわかった。「Zoom」を希望する学生は課題の提出方法やZoomでの授業内容の改善を望み、「課題のみ」を希望する学生はネット環境の整備を希望していることがわかった。

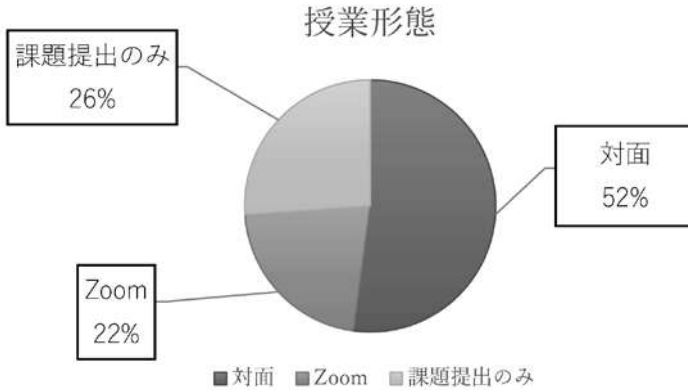


図3 自分に合っている（いた）授業形態

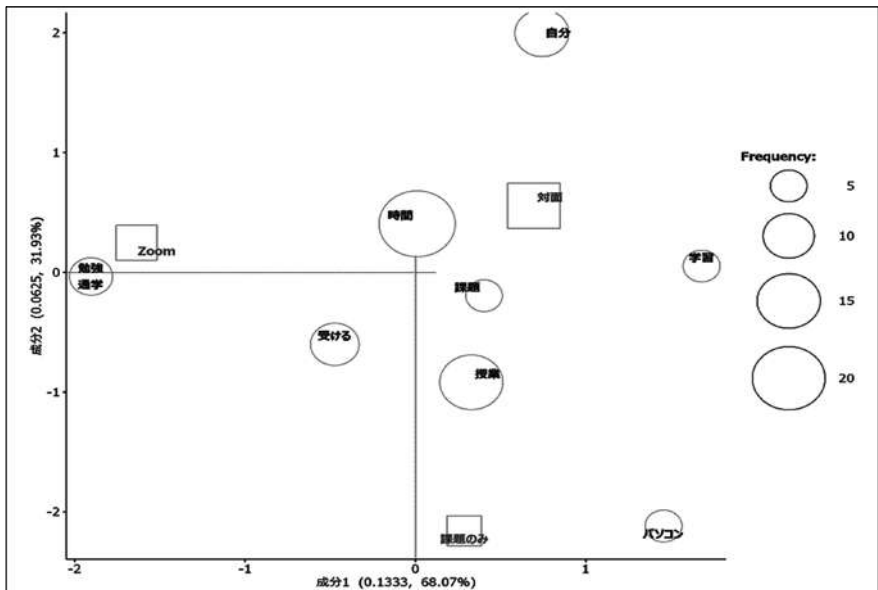


図4 オンライン授業でよかった点と自分に合っている（いた）授業形態との対応分析

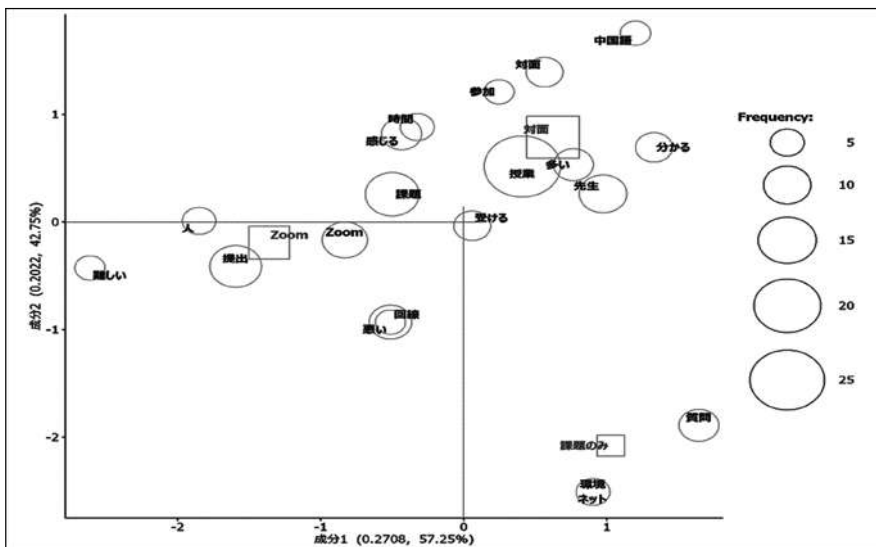


図5 オンライン授業で困った点と自分に合っている(いた)授業形態との対応分析

4. 考察

本研究では1年間のオンライン授業を経験した大学2年生の中国語学習者を対象に、彼らの中国語学習へのビリーフ及び学習への取組み方について、従来の2年生群と比較し検討した。また彼らの感じているオンライン授業の利点、難点について自由記述を通して分析した。ここでは分析結果から見出された2020年の2年生群の特徴をまとめ、今後の学習支援策を提案する。

4.1 1年間のオンライン授業を経験した大学2年生の中国語学習者の特徴

ビリーフの結果からは2020年の2年生群の特徴として3点が示された。1点目は「話す、聞くことの重要性の認識」である(項目7, 11, 13, 16)。「正しい発音」「繰り返し」「練習」などの内容が含まれた項目得点が高かったことは、彼らの話す、聞くことへの重要性の認識が従来の2年生群より高まっていることを示している。そしてこのことは2点目の特徴である「モチベーションの高さ」へもつながっている(項目12, 18, 19)。彼らはオンライン授業においても「中国人との学習は楽しい」と感じ、「中国語を上手に話せるようになりたい」「中国人の友達がほしい」と願っている。一方で3点目の特徴として「中国語を話すことへの不安」も従来より高いことが示された(項目14, 15)。つまり、話したいと思いながら発音やリスニング力に不安があり思い切って話すことができないという状態にあると考えられる。

学習への取組み方の結果からは3点の特徴が示された。1点目は「授業時の孤立化」

である（項目5, 8, 11）。オンライン授業においては私語をする相手もなく、クラス全員の前で発言したり、グループワークやディスカッションでまとめ役となる機会も減少していることが示された。2点目は「課題の取組み方の向上」である（項目6, 7, 14）。オンライン授業では課題を中心とした成績評価がメインとなるため、課題に対し「きちんとやる」「見直してから提出する」という姿勢で取り組む学生が増えたと思われる。なお「グループワーク以外で、友だちと一緒に勉強する」（項目14）については、本来の質問の意図は授業時間外での協働学習の有無について尋ねるものであったが、本調査においては、課題内容について友人同士で話し合うこと以外に、Zoom 授業を「友だちと一緒に勉強する」と解釈したため項目得点平均値が上がった可能性が考えられる。3点目の特徴は「資格取得への意欲の向上」（項目15）であり、資格を取得するため積極的に学習に取り組む姿勢がうかがえた。

自由記述及び授業形態の回答内容からは、オンライン授業では通学時間の減少により学習に充てられる時間が増えた、授業内容を何度も見返すことができるなどの利点があるものの、授業が分かりにくい、質問がしにくい、課題が多い、ネット環境に不安があるなどの理由から、約半数の学生は対面授業を望んでいることが示された。

4.2 今後の学習支援策の提案

1年間のオンライン授業により、2020年度2年生は課題にまじめに取り組む、資格取得を目指して勉強するなどの学習姿勢や意欲が強化され、中国語学習を楽しいと感じ、上手に話せるようになりたいという気持ちも高い傾向にある。一方で発音練習や会話、グループワークなどの教室活動の機会は大幅に減少し、中国語を話すことへの不安を感じている学生も多い。八島2003は「教室内にコミュニケーション活動の場が設けられると、これまで殻という殻の中で一種の安定を保ちつつ、認知的な活動を行うことに心地良さを感じていた学生は、対人行動をもつことを要求されるので、不安定となる可能性がある。教室空間の変化に伴い、従来型の授業と違った個人変数やその他の要因が学習意欲や効果に影響するようになるのである」と述べている。日本人中国語学習者の授業での受け身の姿勢や発言の少なさについては郭2005や王2008でも指摘されてきたことであるが、2020年度生についてはオンライン授業のためコミュニケーション活動に対する心理的ハードルが更に上がっている可能性に配慮する必要がある。今後の学習活動については、1年間のオンライン授業を通して培われた、きちんと課題へ取り組む姿勢や資格取得への意欲を失うことなく、「中国語を話すことへの不安」を「中国語の学習は楽しい」という気持ちが上回るような教室活動を行っていくことが求められる。

5. 今後の課題

2020年度の成績評価はオンラインで実施せざるを得なかったため、従来の暗記型の試験形式とは異なり、テキストを参照しながら応用力や思考力を問う問題が中心となった。このため単純な比較はできないが、従来の2年生群のビリーフおよび学習への取組み方の項目得点とその年の12月に行われる中国語の到達度を測る試験得点について Pearson の積率相関係数を求めたところ、ビリーフでは項目 5, 12, 13, 18, 19, 20 と試験得点との間に有意な相関関係がみられた。学習への取組み方では項目 5, 15, 17 と試験得点との間に有意な相関関係がみられた⁵⁾。このうち「2020年の2年生群」が「従来の2年生群」より有意に高かった項目は、ビリーフ項目 12, 13, 18, 19、学習への取組み方項目 5, 15であった。このことから、2020年生においても中国語の習得状況は一定の水準が保たれていると推察する。今後は学習の定着度について具体的に検証していきたい。

注

- 1) 遠隔授業には、「同時双方向型（Zoom等のWeb会議サービスを使用し、リアルタイムで行われる双方向授業）、「配信型（事前に記録された映像や音声などの授業資料を、随時または期間内に視聴する一方向の授業）」、「課題提出型（提示された資料を自ら読んで、課題に取り組む授業）」、およびこれらの混合型（Zoom授業後に課題を提出するなど）が含まれる。
- 2) 言語学習に対する信念、学習観。本研究では、学習者が言語学習に対して抱いている態度や意識（板井2000）を想定し調査を行った。
- 3) 安藤2020で用いた質問紙は以下である。ビリーフに関する質問紙は、Horwitz（1987）、齊藤（2009）、張（2012）などを参考とし、中国語学習者向けに文章の変更を行い20項目から成る尺度を作成した。回答は5（とてもあてはまる）、4（まああてはまる）、3（どちらともいえない）、2（あまりあてはまらない）、1（全くあてはまらない）の5件法を用いた。学習への取組み方に関する質問紙は、ベネッセ教育総合研究所の「第1回大学生の学習・生活実態調査報告書2008年」<https://berd.benesse.jp/koutou/research/detail1.php?id=3161>の中の「第3章大学での学習」調査に用いられた26項目のうち17項目を使用した。回答は4（とてもあてはまる）、3（まああてはまる）、2（あまりあてはまらない）、1（全くあてはまらない）の4件法を用いた。なお、この調査では回答者の負担軽減のため、過去の調査で中国語得点に有意な影響を与えなかった項目を削除し上記項目数となっている。
- 4) KH Coderについては、<https://kxcoder.net/>を参照されたい。
- 5) 従来の2年生群のビリーフと中国語到達度試験得点相関

ビリーフ	項目 5	項目 12	項目 13	項目 18	項目 19	項目 20
Pearson の積率相関係数	0.22**	0.29**	0.17*	0.21**	0.33**	-0.22**

** p < 0.01 * p < 0.05

従来の2年生群の学習への取組み方と中国語到達度試験得点相関

学習への取組み方	項目 5	項目 15	項目 17
Pearson の積率相関係数	0.165*	0.191*	0.19*

** $p < 0.01$ * $p < 0.05$

参考文献

- 安藤好恵 2018. 「中国語専攻学生の初年次学習成果に影響を与える要因の探索」『お茶の水女子大学中国文学会報』第三十七号, 35-47.
- 安藤好恵 2019. 「日本における中上級レベルの中国語学習者のビリーフと学習への取組み方—初級レベルの学習者との比較から—」『語学教育研究論叢』第36号, 39-53.
- 安藤好恵 2020. 「中国語学習者のビリーフ、学習への取組み方に関する縦断研究」『大東文化大学紀要』第58号〈人文科学〉129-142.
- ベネッセ教育総合研究所 2008. 『第1回大学生の学習・生活実態調査報告書』
https://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/daigaku_jittai/hon/daigaku_jittai_3_1_3.html（最終閲覧日2021年6月12日）
- 樋口耕一 2004. 「テキスト型データの計量的分析—2つのアプローチの峻別と統合」『理論と方法』19(1): 101-115.
- 板井美佐 2000. 「中国人学習者の日本語学習に対する BELIEFS について—香港4大学のアンケート調査から—」『日本語教育』104号 69-78.
- 齊藤良子 2009. 「英語学習に対する好意の学習ビリーフと学習ストラテジーへの影響」『外国語教育学研究のフロンティア—四技能から異文化理解まで—』成美堂, 164-176.
- 八島智子 2003. 「第二言語コミュニケーションと情意要因: 「言語使用不安」と「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」についての考察」『関西大学外国語教育研究』5巻 81-93
- 張麗珺 2012. 「中国の大学における日本語学習者のビリーフと成績の関連に関する一考察」『第9回国際日本語教育・日本研究シンポジウム予稿集』1-8.
- 郭春貴 (2005) 「日本の大学汉语教育問題」《世界汉语教学》第4期.
- 王順洪 (2008) 《日本人汉语学习研究》北京大学出版社.
- Horwitz, E.K. 1987. Surveying student beliefs about language learning. In A. Wenden & J. Rubin (Eds.), *Learner Strategies in Language Learning*. Prentice Hall. 119-129.